



肛辱の令嬢

ロレツ

淫悦に落ちる
乙女の涙

立ち読み版

小説 愛枝直

挿絵 A.S. ヘルメス

プロローグ 秘密

一章 サンタエルミア号の帰還

二章 誤算

三章 道化師の夜の歌

四章 淫悦に落ちる乙女の涙

五章 誰も寝てはならぬ

006

012

053

114

172

231

登場人物紹介

Characters



ロレンツァ・デイ・ ジウラメンティ

大商会・ジウラメンティの若き女当主。庇護欲をそそる幼い容姿ながら、その胆力は凄まじく、商談での駆け引きや魔術戦闘では臆することなくその実力を振るう。



イレーネ

帝国との戦に備え、戦費引き出しにフィオレンティアにやってきた天陰同盟の特使。今回の訪問で、ロレンツァの良き友となる。

ジャコモ

ジウラメンティ商会第二位の地位にある中年男性。商会乗っ取りを画策している。

トマーゾ

魔術に長け、軍事顧問としての役割も担う男。商会内でも高い地位にあり、その発言力は大きい。

アルレッキーノ

調教師。独自の美学のもと、調教行為を行う男。

手首や肘、腿裏などに当たりをつけて、体内に消去陣を何度も描く。だが、あてずっぱうでは解呪できない。

時間を空費しているうちに、仮面の男が戻ってくる。ワゴンを押して持ってきた物は水差しや洗面器、手ぬぐいなどありふれた物ばかりであった。暖炉に火を入れ香を焚き、湯を水で割り、綿布を絞りと準備を始めた青年に、ヒクンと頬をひきつらせる。

「あ、あら、身体を清めさせてくださいますの？ でしたら術を解いて頂けませんかしら」
「かような些事は貴女の奴隷、アルレッキーノにお任せアレ」

想像通りの答えを返し、調教師はベッドに登る。抵抗できない乙女を抱き起こすと、その遅しい胸板に背中を預けさせた。

また服を剥がされ男に肌を晒すのか。思わず両目をぎゅつと瞑つて身構える。しかし、不可解にも手ぬぐいが当てられた先は、夜になお輝く髪であった。

「っ——あ、あの、何をなさってますの……？」

「世にある金糸、その全て残らずかき集めても、貴女の御髪よりも美しい物は一本とてありませんマイ」

問いには答えずに、うなじに息を吹きかけるようにして、仮面の男は世辞を言う。

傷めぬよう丁寧すくに房を掬すくっては軽く叩き、頭の鉢はちに布を当てて地肌を優しく押し揉もむ。かこつけて嫌らしい真似をされるのかと思つたら、この調教師は掛け値なしに侍女の真似事をするつもりらしい。

「ひやうっ……んっ……」

生白い首筋をこすり、耳裏を丁寧にごそぎ、布を返して頬を拭う。新しい手ぬぐいに替えてたおやかな右腕、左腕と、楽しげに寝汗を清めていく。

湯気を立てるお絞りが熱を持って肌をなぞった後に、残った水気を夜気がすつと奪い去って行く清涼感。緊張にドキドキと鳴っていた心の臓が落ち着きを取り戻していく。

(あ……気持ちい………)

綿布越しに大きな手が指を包み、一本一本丁寧に揉みほぐされたとき、うっとりと目を細めて安らいでいる自分に気付き——はっと警戒心を取り戻した。

「も、もう結構ですよ！ あとは自分でできますの！」

「残酷なことを仰らないでください。ワタシが貴女に触れていたいのです」

そう、和^{なご}んでいる場合ではない、この男の役目を思い出せ。彼は私に快楽を教えようとしている。これ、で、正、し、い、の、だ。

その証拠に両手を万歳^{ばんざい}させられたとき、感じた物は嫌悪の混じらない純粹な羞恥であった。金縛りで動きを封じられているとはいえ、子守を受ける幼児のような従順さだ。これから夜着を剥がされようというのである。

男の両手が脚に向き、裾をとってするとまくり上げる。鼓動が再びどくと跳ねた。「いいやつ」

「ですが脱がねば拭けません」

拒絶の声も、どこか甘えたように響く。

外腿を撫で、桃房に触れ、寝間着が取り去られていく。お尻を浮かされずり上げられて、きゅつとくびれた腰が露わになる。恥ずかしさばかりが先に立ち、いやいやとむずがる声も消え入りそうに小さい。絹の肌着をまくり上げるごとに、ぼこんとへこんだ腰椎のラインが、翼の名残のような肩胛骨^{けんこつ}が、仮面の奥の瞳に晒されていく。そしてついに、腕から夜着はするりと抜かれ——下着一枚だけを残り、裸身を露わにされてしまった。

「なんと美シイ……」

アルレッキーノがうつとりと感嘆を漏らす。

(は、は恥ずかしいのですのっ……背中、見られて……！)

暴漢達にも見られていない上身の肌を晒す羞恥に、夜目にも明らかなほど顔色が染まる。紅潮が耳はおろか首元に達して、珠の肌を愛らしく彩る。

視線に敏感なローラは、男の目の位置を把握している。今は上げた両手が傘になり、肩を支える彼に乳房の全貌は見えないだろう。だが、あまりに大きく育ちすぎた果実は、狭い背中では隠しきれない。腋からはみ出た横乳が恥じらいに震える様を、きつと見られているはずなのだ。

そう考るともう、暴れることもできなかつた。視線を遮るように上体を丸める。そうすると余計磨きやすくなるのか、調教師は手際よく蒸し布で背肌を撫でていく。

「んっ……んふ……うんんっ……もういいと……言ってますのに……っ」

「これほど指に吸い付く滑らかな肌は、ワタシも触ったことがあります」

こそばゆさに声が漏れる。慎重に首だけで見返り、せめてもと男を睨みつけた。

可愛らしい抗議に調教師はふっと吹き出す。悪戯っぽく口の端を吊り上げると手ぬぐいで脇腹をつーつとなぞり上げた。

「ひやうんっ！ ……うーっ」

唸るローラもどこ吹く風と、仮面の男は上機嫌である。

ほぼ初対面の男に生肌を見られ触られ、恥ずかしくて恥ずかしくて堪らない。だがどうしても、どれだけ強く感情を呼び起こそうとしても嫌悪の念が湧いてこない。

先頃ローラを癒やした代償魔術の影響である。激しい痛苦を一瞬で取り去られると、傷者は使い手に触れられることを無条件で受け入れるようになる。

思わず気を失うほどの安堵あんどを覚えた身体は、理性を一足飛びにして、彼の手を受け入れてしまっていた。

だが、理屈を知らぬローラは自身の反応の薄さに戸惑うことしかできない。無抵抗をい

いことに、男の手つきは大胆さを増していく。
抱き包むように前身に向かった手が円を描いてお腹なかをなぞり、一番大事な部分を避けて、
ぺこんとへこんだ腋下に廻る。

「ふひっ……ひやっ……もうやめてくださいまし……っ」

敏感な箇所をくすぐられ、令嬢の若肌が小刻みに跳ねる。そのたびに自らの顔の下で、

張りのある乳房がぶるぶると揺れる。

男の視線が気になって気になって仕方がない。にもかかわらず触れられるたび、お転婆で頬につけた泥を父に拭われたときのような、郷愁混じりの安らぎが心に充ちる。抵抗の意思を骨抜きにしていく。

その従順さは男の左手が、たわわな乳果にそつと添えられたときも——結局変わることはなかった。

「あつ……！」

思わず驚きの声を上げる。だが、それだけだった。

続いて右手が蒸し布を当て、甘い膨らみをなぞりだしても、身体は至つて素直なまま。度の過ぎた奉仕を呆気なく受け入れてしまう。

極上の乳肌は、羽毛で掃くような軽いタッチでもふにゆりと沈み、融通無碍むげに形を変える。その男心を狂わせる媚肉にも調教師は何食わぬ様子。指先で豊麗な果実をたぷりと支え、下乳を拭う落ち着きぶりである。

アルレッキーノのやり口は、トマゾ達とは真逆であった。まさに奴隷がかしづくように、優しく乙女の身体を愛撫して、心の壁を取り払っていく。

不意に不合理な妄想が頭をよぎる。本当に彼は、寝汗を清めてくれているだけではないか。他意のない手に心臓を高鳴らせ妙な声を上げる、自分のほうがよほどふしだらな女じやないかと。



火照る頬に引き摺られ、思考まで煮え乱れていく。羞恥心を熱源にして、触れられた柔肌がジンと疼く。巡って高まる未知の情感に少女はただ戸惑う。

そしてついに布端が、ぷつくりと尖った桜色の蕾に触れて――。

「ひああん！」

眩暈がするような、はしたない声を上げてしまった。

「どうされマシタか？」

「だ、だつてえ……」

意地悪く問うアルレッキーノに、もはや幼気にむずかることしかできない。

続いて逆の房にも同様の処置を施され、上半身をくまなくまさぐり終えられたとき――ローラは甘く呼吸を乱し、アルレッキーノの胸板にはしたなく背中を預けてしまっていた。

隅々まで身体を清め終わると、調教師は頭の上に掲げた令嬢の手をそつと取る。呼吸に合わせて、たゆたう乳房を覆わせた。

「ふえ……？」

すつかり夢見心地のローラは緩んだ顔で男を見返る。

懐いて和んだ子猫のような愛らしい姿に、調教師はほんの僅か、酷薄に唇を歪めた。

細腰を持ち上げ身体を倒す。うつぶせにして両手を腋の横に突かされ、背中をぐつと押し込まれる。子猫の少女は膝を突いてぷりんとお尻を突き出した、蝶々に飛びかかろうと

する直前のような姿勢で魔術に固められてしまった。

突然にさらけ出された雄の本性に、油断しきっていた令嬢は目を白黒させる。そして——これからの運命に思いを馳せた瞬間から、さあっと血の気が引いていった。

「ただだけ言葉飾っても、結局することはソレ々ですよ？ 殿方は本当に単純ですよ」
否応なくトマーゾにのし掛かれたときの記憶が蘇る。強気を装ってはみたもの、とたんに心臓が早鐘を打ち出し、胃の奥がギチギチと鳴るような吐き気に苛まれる。

「オオ怒りの乙女、まだその時ではありません。そう怖がらなくとも結構です」

怯えを察してアルレッキーノが、再び優しく頭を撫でる。凶星を指された屈辱に、今度は頬がカッと赤らんだ。

「だがその恐れが問題なのです。緊張こそ快楽の天敵。そして緊張の源は、濡れぬ、狭い穴に無理矢理雄をねじ込まれたことで生じた激しい痛み。今からソレを取り除いてしまいましょウ」

不可解な台詞を宣って、調教師は寝台の端に置いたワゴンに手を伸ばす。小さなタライを引き寄せると、その中に潜ませていた生き物をぬちやりと掬いだした。

「ヒッ！ ななななななんですよ！！ なんですよソレは！」

感情を制御できない。恐怖を隠して余裕を装うことができない。初心な少女そのままに、ロレンツァは怯えた声を上げてしまう。

「東の森向こうに原生する粘蟲を品種改良した物です。ワタシは排蜜蟲と呼んでいマス」

「それでは——ケツマンコに、オチンポを、ハメられて、イクと——さあ、言えマスね？」

「いやああん！ そんなはずかしいこといけませんのおっ！」

「それではあと十八回、ただひたすらイキ続けマスか？」

羞恥に戸惑うローラを諭し、アルレッキーノは挿入したディルドを浅く引く。

疑似陰莖のもつとも太い部分が、尻穴の入り口をネチネチネチネチと引つ掻く。焦らすような動きで、肛悦に乱れる少女を急かす。

「うーっ……ちがうもん……っ、わたくひのお尻、そんなのじゃありませんのおっ！」

「いいえ、貴女の尻穴はもうとつくの昔にオマンコなのデスよ。便の代わりに蜜を垂れ流し、肉棒をくわえ込んでアクメに達スル。これがオマンコでないならいったい何だというデスカ？ ほら今も、チンポを深くハメて欲しいと、キュンキュン絡みついているではありませんか」

言い張るローラに調教師は、再び態度を急変させて、嫌らしい言葉を投げかける。

胸を占めたのは一抹の悲しみ。そして、それを種火に燃え上がる被虐の昂揚。

もう認めないわけにはいかなかった。私の身体はこの男に変えられてしまったのだ。

こなれて蕩けた粘膜面を、肉棒でにちゃにちゃとこそがれると、絶叫してしまいたいようなほどの快感が走る。息んでは締って刺激を貪りながら、奥を殴りつけて欲しいとぐにぐにうねる。こんなのは誰がどう考えても性器に違いない。私のお尻はもう、浅ましく雄をねだる淫らな牝穴なのだ。

「け……ケツマンコ……イクウ……っ！」

自虐的な諦念が理性を断ち切る。気の遠くなるほど卑猥な言葉が喉の底から溢れ出た。

瞬間調教師が、浅い位置でネチネチ前後させていた中太の張り型を、一気に腸奥までぐちゅんと突き込む。そのままぐちゃ！ぐちゃ！と肛門粘膜を強く挟られ――。

「イクウっ！ けつまんこイクウううっ！ あっああっ、イクウ！ おちんぼでえっ……オチンポでけつまんこいじめられてえ……！ イつちやいまひゆのお……！ ケツマンコいじめられてイつちやいまひゆのおおおっ！」

ローラは極限の絶頂に達した。

肛悦に意識を寸断されて、言われたとおりの台詞を紡げず、ふしだらな単語を行きつ戻りつ何度も何度も繰り返す。

そのたびに突き上げるような羞恥がこみ上げ、なぜかまた興奮が増す。降りることもできず令嬢は淫楽の大波に翻弄された。

ぎりぎりど歯を食いしばったかと思えば、唇を緩ませ舌を突き出し、だらしなく口の端から涎を垂らす。瞳は虚ろに光が消えて、あひい、あへえと悶声を零す。その無様な姿に昔日の聡明さは見る影もない。

ねっとりぬかるんだ尻肉壺が、ぐにゅぐにゅとうねりながら異物の表面に粘り着き、出もしない子種をねだるようにきつく締まる。

その反応に同調し、腕が脚が、ぎりぎりど男の体幹に縋りつく。細かく震えていた腰が

ガクガクと激しくぶれだして、自ら埋められた淫具をヌチヌチと出し入れしてしまう。それが最後の追い打ちとなった。

限界を超えて括約筋が盛り上がる。張り型の外周から押し出されるように腸蜜がブジュッ、ブジュッと何度もしぶく。シーツの上に飛沫が飛び散り、やがて大きな水跡を形作る。「あひえ……あ、あわ……あああああ！ あ……う……」

深い陶酔に頭まで浸かり、溺れたように悶え狂う。唐突にギクン、ギクン！ と危なっかしい痙攣を見せ——次の瞬間ふつつり糸が切れるように、一切の力を失ってしまった。

「オヤ、寝てしまったのデスか？ 仕方ありません。今日の調教はここまでとしましヨウ」両腕をだらんと垂らして男の胸板に全体重を預け、死にかけの虫のようひくつく。

アルレッキーノは労るように、小さな背中をとんとんと叩く。もはや言葉の届かぬ少女に向けて肛辱の終わりを宣言した。

「それにしても……ワタシの可愛いローラ。貴女は、虐められてイクのデスネ」

だが——本人も気付かなかったささやかな間違いを、手練の調教師は決して見逃さない。「それでは明日からも、たくさん、虐めて、あげるとしましヨウ。そう……貴女が涙を流すマデ」

愛しげにローラを見下ろす瞳には確かな狂気が宿っていた。

その日から——まさにローラは『虐められ』続けた。調教は肉体に快楽を教え込む段階

から、仕込んだ快樂を軸に、異常な性癖を植え付ける段階へと変わった。

毎日毎日ボロボロになるまでいたぶられ、何をされてもイクように身体を造り替えられていく。もはやローラは屈する寸前だった。

「んうっ……うウンっ！ ひう……ううーっ！」

ベッドの上で今日も躰けを受ける。

くぐもった呻きが室内に響く。口は海綿でできた枷かせに塞がれて、言葉を形作れない。

肩から肘まで自由を奪われ、仰向けではしたなく股を広げていた。

身体中熱くて堪らない。とめどなく汗が噴き出しては流れ落ち、自ら吐き出した蜜と合わさり腰の裏をぐっしより濡らす。

アナルは今日も淫具にぐちよぐちよと掻き混ぜられている。直腸をみっちり満たす疑似陰茎は、亀頭と根元にイボ贅が生えていた。抽送のたびに奥と入り口の一番気持ちいい所がぞりぞりと擦れ、あられもなく腰が何度も跳ねる。

どれぐらいの太さがあるのかはわからない。どんな形をしているのかも、正確にはわからない。視界は目隠しで覆われて、確認する術などどこにもなかった。

「うっ……ううーっ！ うううう……っ」

真つ暗闇のなか、視覚以外の五感がひたすら鋭敏になっていく。

尻粘膜の性感はもろろん、脳裏に響くねぢねぢと嫌らしい水音、甘ったるい汗の臭い、そして——今も口の中に残る生臭さ。全てがローラを狂わせて、絶え間ない肉悦にイキ悶

えさせる。

(ひどいでのお……こんな、こんなこと……ひどいでのお!)

『酷いことをされている』——そう意識することで被虐に慣れた女体が燃え上がる。ぞわぞわと全身が粟立ち、淫具の抽送が激しさを増す。

見計らったように誰かが形の良い小さな鼻を摘み——ドロリと。口を塞ぐ海綿の上に何かを垂らした。

「んう!? ぐうーっ!」

くぐもった絶叫が響く。スポンジに染みて口の中に汚濁が降りる。脳天に突き抜けるような性臭が閉じた鼻腔いっぱいには拡がった。

枷が邪魔で吐き出すこともできないのに、灼けた肺が空気を求める。

息はずっと上がりっぱなし。一秒だつて止めていられそうにない。嫌で嫌で堪らない。ただどうしても我慢できない。ズズと綿を啜り——ゴクリと飲み込んでしまう。

(いやあ……また、臭いの飲んじやいましたのお……)

胸一杯に生臭さと惨めさが広がり、なぜか頭の芯がぞわりと痺れた。

イキ慣れた肉穴を虐めさせられ、イクたびに汚濁を飲まされる。だんだん両者が結びつく。吐き気のあるそれを飲まされるのが、気持ちいいのだと身体が誤認する。

本当は、何を飲まされているのかも気付いていた。きっとこれは、男の精液だ。調教師は私に、子種を飲まされてイク癖をつけようとしているのだ。

「う……ううっ!? ううううウン! うっうううーっ!」

意識した瞬間不意打ちのようにまた雄汁が注がれる。すると——なぜか閉ざされた視界が真っ白に染まった。

前触れもなく牝腰をガクガクガク! と振るわせ、ローラはアクメを極めてしまう。

(あああっお尻の穴……きゅーってえ……!)

淫具に媚びてへばりつき、菊壺がぎちぎちと締まる。総身のこわばりが限界を超えた瞬間、急激にがくと脱力する。雲に乗ったような浮遊感のなか、ヒクンヒクンと肢体を震わす。

(うあ……ああっ……あ……わたくし、またあ……)

一心不乱に絶頂を貪ったあと、こみ上げてくるのはずんと重い後悔だった。

私はイっちゃいけないのに。イけばいくほど、魔術の発動に近づくのに。

わかっているでも尻穴をこそがれ、ペットの躰のように、変態的な芸を仕込まれていると、何も考えられなくなってしまう。淫らな悦びで頭がいっぱいになってしまう。

「うううー……! おおうういでえーっ!」

「どうしまシタか?」

変わっていく自分が怖くて怖くて堪らない。堪らず悲鳴を上げたローラに、調教師が優しい声で問いかけた。

不意に口を塞いだ枷が外される。本能の命じるまま胸一杯に外気を取り込み、戻った息

で必死に叫ぶ。

「もおいやですのおっ！ これいじよお、わたくひに、へんなイキぐしえ、つけないれえっ！」

「変なクセ？ こういうことでショウウか？」

アルレッキーノはそらとぼけると、せえぜえと喘ぐ口に容赦なくまた汚濁を流し込む。

「んうううっー!! ……んぐっ……あああ……くひやあい……っ、またおうちに、くひやいのお……!! せええき、どろおつてえ……っ」

直接舌に乗せられた子種を反射的にゴクリと飲み干す。ぞわぞわと走る怖気が尻肉壺を締め付けさせて、またマゾヒスティックな興奮がぶり返した。

「あああイクう！ せええき飲んでイっちゃいますのおっ！」

仕込まれ続けた淫らな台詞を無意識のうちに喚き散らし、全身を震わせて悶えよがる。吐き出す吐息まで精液臭くて、その惨めさにまた絶頂に追いやられる。

小康に落ち着いたあと、はへ、はひとふしだらな喘ぎがいつまでもやまない。被虐を主体に極めたアクメは、思考を酷く曖昧にした。

闇に閉じた視界の向こうで、男の笑う気配がする。

「気付いていたのデスね、賢いローラ。デスが……これを雄の子種と知っていたなら、なぜ貴女はそれを飲み干したのデス？」

「……っ！ じぶんが……のまひえた、くひえにいつ！」

あまりの言いぐさにずきんと胸が痛む。震える声で抗弁する。

だが、虐待に狂って呂律の回らぬ少女の声は、その可憐さで男を愉しませるばかり。

それどころか調教師は落ち着き払ってあっさり——。

「飲・み・た・く・ない・なら、吐・き・出・せ・ば・よ・か・つ・た・で・は・な・い・デ・ス・か」

令嬢の秘められた欲望を暴き立てた。

「え……………？ あ……………らって……………らってえ……………っ」

「それにそもそもオ・モ・チ・ヤを動かしているのは、貴・女・自・身・で・は・あ・り・ま・せ・ん・か」

「あ……………わ、わたくし……………ああああっ」

絶望の余喘が喉から漏れる。恥ずかしくて恥ずかしくて堪らない。惨めで惨めで堪らない。だが、彼の言葉は紛れもない真実だった。

少女は仰向けに寝かせられている。はしたなく股を開き、ぐねぐね淫らに腰を振り立てている。両手は肘から肩まで魔術が固める。そして二つの掌は、重・ね・ら・れ・て・淫・具・の・基・底・を・掴・ん・で・いた。

「ワタシは言っただけです。離したければどうぞ離してくださいと」

「あう……………だつてえ……………あつ、んんううっ……………ひうっ……………うう……………だつてえ……………」

反論の言葉もなかった。

離そうと思えばいつでも離れた。それどころか、埋められた張り型を抜くことだつてできた。なのに『ひり出す様を見られるのが恥ずかしい』などと、自分に言い訳をし

て、ローラは太い疑似陰莖で直腸を満たしたままでいることを選んだのだ。

じつと堪えているうちに、意識が肛門に集中し、入り口がきゅつ、きゅつと閉じ開きを始めた。身体が勝手に始めた悪戯を、気付けばわざと続けたのだ。

腹腔を息ませ、穴奥が亀頭にぐじゅりと絡む感触を愉しみ——ぎゅーつと括約筋を窄めて幹の太さ硬さを貪り——。

甘い喘ぎが漏れる頃には、ネヂ、グジュと水音がするほど菊壺を蠢かせていて——じれつたい刺激に我慢できずに、ついには淫具のほうをぐちゅぐちゅ動かしたのだ。

男が口枷に精液を垂らし始めたのは、それからずっと後のこと。結局、ローラは一人で勝手に肉欲に負けて、あられもなく痴態を晒していたのだ。

わかっているのに、どうしても手を止められない。発情しきった身体が貪欲に刺激を求める。腸壁をこじれとローラに命じる。

ふしだらに変わり果てた自分に改めて気付かされ、心を重い絶望が満たした。「いい加減認めておしまいなサイ。涙知らずのロレンツァ」などはただの幻想。本当の

貴女は虐められるのが大好きな、小さな可愛い女の子デス」

「うううちがいますのお……こんなの、好きなんかじゃありませんのお……!!」

アルレッキーノの声が頭の上で響く。甘えた声で強弁しても、説得力は欠片かけらもなかった。悔しくて恥ずかしいのになぜか胸がきゅうと疼く。指摘をされたそのままに、意地悪を

言われて悦んでしまう。お見通しの調教師は愛くるしい痴態に苦笑して、前触れもなく目



隠しを外してしまった。

「まったく強情な方デス……とはいえ嫌だと仰るならしかたありません」

「つ……ふえ……?」

ぼやけて滲む視界にまず映ったものは、自分を見下ろす道化の姿。微笑みかけながら、デイルドを強く握った指を丁寧に剥がしてしまう。

鼓動がどくんと強く跳ねた。きつと彼は、むずかるローラに苛立つて、代わりにこの肉棒をぐじゅぐじゅ激しく出し入れするつもりなのだ。

だが、怯えというよりもはや期待に近い想像を、仮面の男は裏切った。張り型を挿みはしたが、抽送は行わない。そのまま責め具を、ずるりと尻壺から抜き取ってしまう。

「ひやううんっ! ど……どうしてえ……っ?」

問う声に明らかな不満がにじんで、眩暈がするほどの羞恥がこみ上げる。

男は答えない。ただ腸蜜にまみれてねらねらと光るそれを枕元に置く。そして例のガラスの器をとり、まるで儀式のようにベッドの上を様々な淫具で埋めていく。

「なあに……? なにをなさるんですのっ」

その一つ一つを覚えていく。今日までの調教の間、尻穴を寛げ掻き混ぜて、何度も自分をアクメに導いたオモチャ達。まざまざと肛辱の日々が脳裏に蘇る。異物を抜かれてばかりと開いたままの媚粘膜が、恥悦の記憶にじんじんと疼きだす。

今度こそわかつてしまった。お尻から張り型を抜いたのは、また別のデイルドを使って

かわるがわる虐めるためなのだ。

その予想も間違いだった。調教師は数々のデイルドをただ並べただけ。

続けて男は何を思ったか、今までさんざん飲ませてきた白濁液をドロリと自らの掌に垂らす。そして——金の髪に擦り込みだした。

「ヒっ!? いやああああっ! だっだめですのっ! だめええええっ!」

喉から悲鳴が迸る。耳の横でにちゃにちゃと汚らしい水音が鳴り、自慢の金糸が雄臭に征服される。心の芯まで穢されたようなおぞましさに身をよじって取り乱した。

次いで男は牝腰を押し込んで持ち上げる。でんぐり返りの途中のような、お尻を真上に高く掲げた羞恥姿勢をとらされてしまう。

(あああ……今度こそお……)

強烈な予感に女体がわななく。陵辱への期待がもはや否定のしようもなく高まる。今度こそ彼は私の恥ずかしい穴を、失神するまで虐めるつもりなのだ!

しかし——結局それも外れであった。アルレッキーノはそつとローラの首に呪石のついたネットワークスを架けただけ。そのまま枕元から離れていった。

「え……? ど、どうして……どうしてですのおっ!!」

「水差しが空になってしまいまシタ」

振り返り、悪戯っぽく持ち手を揺すって指し示し、また背中を向ける。

「望むことがあるならば、そのペンダントを使ってくだサイ」

黒の薄絹に透ける背のラインはうなじで途切れ、見えぬ頭が剥奪された人間性を象徴して昏い征服の愉悦を煽り立てる。同源の死体を抱くような薄ら寒さは、枷越しに絶え間なく響く淫らな喘ぎが中和する。

この上ない魅惑の女体に、男は覚え立ての少年のようにガンガンと腰を振り立てた。

「ヒーン！ あっあヒッ♡ あヒィ！♡」

「おおあつあああいかん！ こ、これは……よすぎるっ！」

だが、あまりに刺激的すぎる交接は、たちまちに雄を追い詰めてしまう。

焦りながらも男は腰を止められない。まるで下半身だけが悪魔に乗っ取られでもしたかのように、ぐちぐちぐちぐちと下品な水音が立つほど尻壺を掻き混ぜ続ける。

「あうん！ まだ出しちゃだめですのおっ！ もっとおっ……もつといじめてえ……！」

連日の肛辱の中で雄の生態を覚えたローラは射精が近いと察知する。甘えた声で駄々をこね、ピストンを邪魔しようとする菊壺をきゅうんと絞り上げた。

「ぬおおまた締め付けが！ これでは魔術が！ 魔術が！ ……ああああ！」

だが、ねつちりと腫れた濡れ媚肉での抵抗で抽送を食い止めることなどできるわけもない。無意味どころか摩擦が増して逆効果に男を追い込んでしまう。暴発を促し、びゅぶ、どくっ！ とスペルマが直腸に放たれた。

「ひあああん！ うううつわたくしらめっていましたの……っ」

往生際悪く漏出をとどめようとするとするせいで、腸内射精はどろどろとだらしなく続き、前触れもなくぼんやり終わる。まだイキ足りない令嬢は、甘えた声で恨み節を零した。

「あああなんと言うことだ………おおっ？ おおおおおお！」

男も声を震わせ後悔に浸る。だが、その僅か後にため息を吹き飛ばすような輝きがローラの下腹からわき起こって陵辱者を包む。

そして先ほど同様に、彼もまた魔術を得て若返ってしまった。

思いがけずに力を得られ、やはり男は呆気なく陰茎を抜いてしまう。

解放感に「あうん」と甘鳴き、ぼつかりと開いたアナルからどろりと白濁を零す。だが男は令嬢よりも、見違えた自分自身にご執心であった。

「おおお、おほっ！ いやいやいや、だがこれはどういうことだ？」

「だってえ……おちんぼハメてもらってから、わたくしずっとケツあにヤイキまんこしてますのおっ！」

男は喜びながら器用に困惑する。空の尻壺が寂しくて物足りなくて、雄の関心を少しでも引こうと蕩けた声で答えを返した。

「……次はオレだ！」

「ふざけるな！ 若造はすつこんでおれ！」

令嬢の言葉にいきり立ったのは、むしろ周囲を囲む男達である。

常に絶頂し続けているなら失敗することなどあり得ない。様子見の空気は吹き飛び、肉

棒を剥き出しにして我先にと群がる。

競り合いから抜け出した一人の男が腰裏に陣取る。まるで所有を主張するように桃尻をきつく掴んで陰茎を突き立てた。

「よおし挿れるぞ！ 感謝しろこの変態娘！」

「はひいっ！ いひあああああ！ あっありがとうございますうっ♡」

ぐぶぐぶとまだ閉じきらぬ尻穴を再び寛げられて、従順に感謝を叫ぶ。

いつでも魔術を得られるものと、二人目の男は初めから全開で腰を揺すり立ててきた。

「ハああ、ああああおっ！ おっ、おちんぼ……激しいですのおっ♡」

ガンガンと荒々しい抽送は頻繁に軸がぶれて、腸壁の裏を表を不規則に殴りつける。

振動は真下を向いてたつぷりと伸びた乳房に伝わった。二つの肉果がたゆんだゆんと揺れて陵辱の激しさを物語る。

「く、くそ！ おい牝牛め！ さっさと搾り取ってしまえ！」

あぶれた初老の男が少女に罵声を浴びせてしゃがみ込み、はしたなく存在を主張する乳房の一つをむぎゆりと驚づかみにした。指がめり込むほどにごねごねと握られ、きつい虐悦がこみ上げる。

「いぎいっ！♡ ヒっひいっ♡ そんないじめかたあ、あたまおがじぐなっちゃいますのおっ！♡」

きつく歯を食いしばって苦鳴を上げ、枷から突き出るちんまりとした手を握り込む。痛

みしか生まない乱暴な愛撫は、自分が今男達の玩具でしかないことを思い知らせ、身体以上に心を酷く昂らせた。

「おっおお縮まる！」

加えてこんな扱いを受けて興奮してしまう恥ずかしさが更に少女を追い打つ。

マゾの悦びに後天性器が収縮し、にぢゆりと肉棒をしごき立てる。いたぶられるほどより男を愉しませてしまう惨めさが、またいつそう陶醉を深める。

「ヒヒヒざまあみろ、さっさと出してしまえ！ おい、お前らもぼやっとしとらんでロレンツア様を虐めてさしあげんか」

そして、令嬢の痴態は男達の嗜虐を煽り、一段とその責め苦をエスカレートさせる。

癡悪どうあくに嗤いながら無数の手が伸びてくる。残された片乳がまず掴まれる。絞り出されて先端のしこりをこりこりとつままれた。薄絹の中に手を滑り込ませ背中をなぞられ、内腿をびしゃびしゃしつこく叩かれと、されるがままに汗濡れた雪肌を颯り回される。

「ひぎっ♡ イiiiiiiiiん！ あああひどいでのおっ！♡ しゅごいひどいでのおっ！♡」

ぶつけられる獣欲が令嬢を乱れさせ、その媚態がまた男達を熱狂させる。ぐるぐると劣情が循環して高まり、舞台に登った誰ももの正気を奪っていった。

「もう我慢できん！ さあお嬢様、可愛いお口にも大好きなモノをくれてやりますぞ」
あまりにも白熱した空気は男達を暴走させるのに充分だった。目的を見失う者まで出始

めて、丁度腰の高さにある口に滾る逸物が突きつけられる。

「あっああっ♡ おちんぼっ♡ おちんぼおっ♡」

眼前でビクビクと脈打つ赤黒い怒張に目が釘付けになる。迎え入れるようにぱっくり口を開き、牝犬のように舌を突き出してへっへつと熱い吐息を吐きかける。

「バカかお前は。何のためにここに登ったんだ」

「なあに、出そうになつたら取り上げてやればよいのさ」

尻肉穴を占める男は呆れた声で水を差す。身勝手な胸算用を返し、男がずいと腰を進める。涎まみれの唇を割り開き、肉傘がじゅぷりと埋められた。

「んんううっ！ んぐっ、ふう、ううん……んんっ！」

雄の獣臭が嗅覚に、汗蒸れた塩味が味覚に刺さる。夢中で舌を絡めてくちゅくちゅと肉肌をねぶる。

「おっおおおほっ！ べろんべろんしゃぶりつきおっ！ そんなにちんぽが美味いか！」

「あはっ♡ んぐう……おいひい……れひゆのお……♡」

蕩けた顔で男根をねぶり浅ましく鼻息を鳴らす様には知性の欠片も見当たらない。

頬を窄めて亀頭を練り、肉筒の中身を吸い出すようにジュルジュルと下品な音を立ててすすり上げる。唇で肉輪を作り顔ごとぶちゅぶちゅと前後させて肉竿をしごき立てる。

熟練の娼婦もかくやの口淫奉仕に、雄肉はビクビクと脈打ちその硬さを増していった。



「ちゅいてえ……おくひもごちゅんっへえ……♡」

口中で跳ねて膨らむ肉棒の逞しい感触に、ローラは堪らなくなってしまう。上目遣いで媚びて見上げ、淫蕩の極みのおねだりをする。

蠱惑の痴態は雄の理性を容易く砕き、金の髪に飾られた小さな頭を掴ませた。

「ふっひひ！ し、仕方のないお嬢様だ！ 喉の奥までぶち込んでやるぞおおっ！」

塩梅を見てやめさせるなどという算段は吹き飛んだ様子である。口を犯す男は勢いよくごりんと怒張をねじ込んだ。

「んぐう！ おぶううううーっ！♡」

食道にまで雁首が達し、くぐもった悶声を上げて全身をびくつかせる。

こみ上げるのはきつい嘔吐感と、その何倍もの肉の喜び。えずきながらも少女は卑猥にヒクンヒクンとよがり悶える。

「ぐううう！ こっちまで締め付けてきやがった！」

「おほっ、とろとろのマンコ顔しおって、喉奥突かれてアクメしおったか」

窒息感が腸管までをも強張らせ、尻で繋がる男が低く吠える。

みっちりと勃起肉に口内を占拠される苦悶に惨めさを煽られる。頭を真っ白にしたローラは、得意満面の指摘に必死でこくこくと頷いた。

「うひっひひひっ！ チンしゃぶでイキまんこするとはなんとどスケベなお嬢様だ！」

血走った目で見下ろしてくる男は興奮のあまり品性の欠片もない台詞で令嬢を詰り、こ

めかみに添えた手にぐぐと力を込めてカクカク腰を振り立て始める。

ぐぼっ、ぐぼっ！ と、何度も何度も肉エラが咽喉をこそぐ。喉奥まで亀頭を押しつけ、突き出した腹で小鼻を叩く。

急速に粘度の高い唾液が分泌されて口いっぱいになり満ちて腐肉に掻き出される。粟立って白く濁る粘液が顎を伝ってダラダラと零れた。

「……………っ♡ ………………っ♡♡」

「マンコを弄られとるわけでもないのに、よくもここまで感じられるものだ」

「何しろ女王タイスの力だ。生まれながらの淫乱なのだろうよ」

まるで牝器そのもののように喉をこりこりと抉られ、その間も菊壺は混ぜ返され続ける。肌を齧る男達も前後から肉槍に貫かれた少女の無残な姿に嗜虐を煽られ、口々に野次りながら摘み取り握り叩きと調子に乗って虐め抜く。

牝肉の全てを余すところなく弄ばれる激淫に、ローラは声もなくイキ震え続けた。

「ああ何とたまらん喉マンコだ。もう魔術など知ったことか！ そのちっちゃなお口にたっぷりミルクをくれてやるぞ！」

一心にオルガを貪るローラの媚態に、口姦を強いる男は完全に我を忘れてしまう。

顎に陰囊が当たるほど腰をせり出し奥まで突き込み、更にぐちぐちぐちと剛直を揺すり立てる。そして、頭の鉢が割れそうなほど握り込み、ブルブルと下腹を震わせ――。

「んおおっ！♡ いぐうううううううーっ！♡」

びゅぶ、どぶ！ とおびただしい量の汚濁を吐き出した。

口内で肉棒がビクン、ビクン！ と暴れる。苦しさと、とめどなく垂れ流される子種汁の生臭さにローラは濁った声で唸りよがった。

咽喉がうねって男根に絡みつく。半ば白目を剥いた凄艶な淫貌でガクビクと打ち震え、調教師に躡けられた精飲絶頂のクセを余すところなくさらけ出す。

やがて射精が治まり、男達が予想だにしなかった異変が起きる。乱暴なイラマチオで口唇を犯しぬいた男に、ローラの魔術が発動したのだ。

「おっおおっ！ なるほどイかせられるなら口でも構わんというわけか。そんなにチンポ汁が美味かったか？」

「ま、まじゆくて……きもぢよかつひゃ……れひゆのお♡」

若返った男が得意げに尋ねる。正直な少女の答えにドツと笑声が上がった。

味覚を穢される惨めさに昂る令嬢の倒錯性癖を、獣の群れは理解出来ない。彼らはただローラという牝奴隷を、思うがままに騎ることができればそれでいいのだ。

その認識を補強するように胸をいたぶる男が捏ねるのをやめ、ばぁんばぁんとはたいて遊びだす。頭の中が焼き切れそうなほどの虐待が燃え上がり、少女は矢も楯もたまらず上擦る声で快美を叫んだ。

「んぎいッ！♡ いぐう……イグう！♡ わたくひい……おもちゃですのお……♡ おとこのひとのお……おもちゃですのおッ♡」

「そうだ！ お前は男に魔力を与えるただの道具だ！ おおおつ中にくれてやるぞ！」

絶え間ない暴虐に女体をくねり躍らせ尻牝壺をうねらせて、令嬢は途切れることなくアクメを極める。男はその浅ましい姿に憤怒に近いほどの激情をぶつける。

ぐちぐちと奥を突いて腰をせり出し、どばっ、どばっ！ と勢いよく子種を吐き出した。「ひあああああつ！ あうん！ ちがうのお……ろーらは、おもちゃですのお……っ」

だが——男達とローラの欲望は根本の所で噛み合っていない。尻壺に熱湯を吐き出し終えて魔術の恩恵を得ると、やはり彼もいそいそとペニスを引き抜いてしまう。もはや少女には目もくれず、喜び勇んで新しい力の、試し打ちを始めてしまう。

「何をごちゃごちゃ言っている。どれ次は私が犯してやろう！」

ぐずる令嬢の訴えを軽くあしらひ、また次の男が菊腔を貫く。欲望に支配されたケダモノ達の中に、その細かな違いを気にかける者は皆無であった。

何人もの男が身体を通り過ぎていく。尻の牝器をほじくり返して悶絶させては自分勝手に埒を明け、喉奥に陰莖をねじ込んで子種を吐き出し、後は知らぬとばかりに手に入れた魔力に夢中になる。

「あつ……あわ……ああ……ちがいまひゆの……ちがいまひゆのお……っ」

ロレンツアはぶつぶつと呪文のように同じ言葉を呟き続けた。

日が傾いて空気に赤みが差し、斜めに長い影が伸びるまで犯され続けた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元
2DDREAM MAGAZINE
成人向け雑誌

ミルフィユの新作PCゲーム情報も載ってるよ!

恋魔の娘

偶数月
17日発売

950円

ニ次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法
08
Hisasi

魔法は呪い! 魔法転換! 魔法転換! 魔法転換! Hコミック誌!

奇数月
12日発売

魔法

コミックアンリアル

フェチをテーマに突き抜ける作品群!!

フェチ
440円

フェチをテーマに突き抜ける作品群!!

2・6・10月
下旬発売

フェチ

コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

メガミクライシス
Vol.7

淫らに堕ちまくる
アンソロジー!

奇数月
中旬発売

メガミクライシス

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

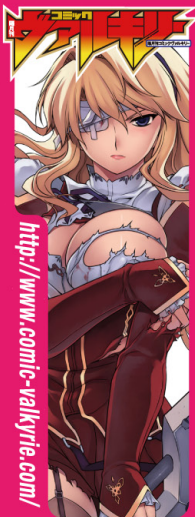
※いずれも18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!